

にも越たり、ある冬の夜、雪いと白ふ降りければ、近邊の雅人來り、千翁をさそひ雪見に出んと有し時、不角も同じく同道し出んとする時、獨の小野郎を供につれて出んとはやく支度いたせらちあかぬなど、千翁野郎をまかりければ、其女房不角に向ひ、何れも風雅の面々は、さこそ雪の面白かるべき、此奴僕何の面白き事有ていさむべきや、一とせ安藤冠里公の、あれも人の子なりといふ初雪の句もあり、陶淵明が薪水の勞を助け、是も又人の子なりとの仁心の辭を思ひ賜へ、手前の子ならば供には連賜ふまじと云ければ、不角いかにも其方が仁心感じ入たり、則其一言發句になりたり、

我子なら供には連じ夜の雪、是は我が誤りたりとて閉口してけるとなり、今女房尼に成て、妙閑といふなり、

〔東都歳事記十五月〕看雪 隅田川堤 三圍 長命寺の邊 眞崎 眞土山 上野山内都て 不

忍池 湯島臺 神田社地 御茶の水土手 日暮里諏訪社邊別當淨光寺を雪見でらといふ 道灌山 飛鳥

山 王子邊 目白不動境内 牛天神社地 赤坂溜池 愛宕山上眺望尤 八景坂俗誤といふ

大井と荒筋の間なり、此地元ハ八景あり、佳景の地也 吉原

以雪作雜物形

〔萬葉集 十九〕于時介天平勝寶三年正月三日會集 積雪彫成重巖之起、奇巧綵發草樹之花、屬之掾久

米朝臣廣繩作歌一首、

奈泥ナヂ之故波シコ秋咲物乎、君宅キミガ之雪巖ユキイハ爾左家ニサケ理家リケ流可ルカ母

遊行女婦蒲生娘子歌一首

雪島巖ユキジマノイハ爾殖有ニタテルナ奈泥ナヂ之故波シコ千世チヨ爾開ニサカ奴可ヌカ君之キミガ插頭カサシ爾

〔拾遺和歌集十七〕雪をしまゝのかたにつくりてみ侍けるに、やう／＼きえ侍ければ、

中務のみこ親王 平